

与謝野晶子訳

源氏物語 蜻蛉卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

蜻蛉

紫式部

與謝野晶子訳

ひと時は目に見しものをかげろふのあ

るかなきかを知らぬはかなき（晶子）

宇治の山荘では浮舟うきふねの姫君の姿のなくなったことに驚き、いろいろと捜し求めるのに努めたが、何のかいもなかった。小説の中

の姫君が人に盗まれた翌朝のようであつて、このいたましい騒ぎはくわしく書くことができない。

京からの前日の使いが泊まつて歸らなかつたため、母夫人は不安がつてまた次の使いをよこした。まだ鶏の鳴いているころに出立たせたと云つてゐる使いにどうこの始末を書いて歸したものであろうと、乳母めのとをはじめとして女房たちは頭を混乱させていた。

何のわけでどうなつたかと推理してゆくことができずに、ただ騒いでゐる時、浮舟の秘密に関与してゐた右近うこんと侍従だけには最近の姫君の悲しみよう、煩悶はんもんのしようの並み並みでなかつたことから、川へ身を投げたという想像がつくのであつた。泣く泣く夫人

の送ってきた手紙をあけて見ると、

あまりにあなたが心配で安眠のできないせいでしょうか、今夜は夢の中であなたを見ることすらよくできないのです。眠ったかと思うと何かに襲われて苦しむのです。そんなことで気分もよろしくなくて困ります。移転される日の近くなったことは知っていますが、それまでの間をこの家へあなたを来させていたく思います。今日は雨になりそうですからだめでしょうか。と書かれてあった。昨夜浮舟の書いた返事もあけて読みながら右近は非常に泣いた。こんな覚悟をしておいになったので心細いようなことをお言いになったのである、小さい時から少しの隔

てもなく親しみ合った主従ではないか、隠し事は塵ちりほどもなかつた間柄ではないか、それなのに最後に自分をおうとみになり自殺の気けぶりもお見せにならなかつたのは恨めしいと思うと、泣いても泣いても足らずあしらず足摺りあしずりということをしてもだえているのが子供のようにあつた。悲しんでいたことにはよく気はついていたのであるが、自殺などという恐ろしいことの決行できる方とは見えぬ、優しい柔らかい心の持ち主だつたではないかと、まだ事実を事実として信じることができずにただ悲しいばかりの右近であつた。乳母はかえつてはげしい驚きのために放心して、「どうすればいいだろう、どうすれば」

とばかり言っているのである。

兵部卿ひょうぶけいの宮も普通でない気配けはいのある返事をお読みになったため、どんなふうな気になっているのであろう、自分を愛していることは確かであるが、移り気であると自分の言われていることに疑いを持っていたから、大将の手へ行くのではなくどこともなく行くえをくらまそうとするのではあるまいか、と不安でならずお思いになって使いをお出しになった。

使いが来てみると家の中は女の泣き叫ぶ声に満ちていてお手紙を受け取ろうとする者もない。どうしたことかと下の女中しもに聞くと、

「姫君が昨晚にわかにお亡かくれになりましたので、女房がたはだれも気を失ったようになっていらっしやるのですよ。御用をお取り次ぎしましてもだめでしょう」

と言った。何の事情も知らぬ男であったから、くわしく聞くこともせずに帰ってまいった。そして山荘の出来事を取り次ぎによっておしらせしたのであった。宮は夢とよりお思われにならない。ひどく病をしているというふうでもなく、いつも気分がすぐれぬとは書いてあったが、昨日きのうの返事にはそれも書かず、平生のものよりも情の見えることを言って来たではないかと不思議にばかりお思われになつて、時方ときかたに自身で宇治へ行き確かなことを調

べて来るようにお命じになった。

「あの大將のお耳にどんなことがはいつたのですか、宿直とのいをする者が忠実に役を勤めないというお叱しかりがあったとかで、私の侍が使いにまいったり、帰ったりいたしますのさえ、見つけますと調べ立てるようなことをする者らがあるそうなのですから、口実なしに私が行きまして、それが大將さんへ知れますとあなた様の御迷惑になることが起こるのではございませんでしょうか。そしてまた人が急病でお死になつた所などというものはおおぜいの人が集まってもいるでしょうから」

「だからといって、訳のわからぬままにしておけるものではな

い。何とか口実を作って行って、こちらの味方になっている侍従などに逢^あって、真相を確かめて来てくれ。どんなことをこういうふうに言っているかをね。下人というものはよくまちがったことを聞いて来たりするものだから」

こう仰せられる宮の御様子においたましいところの見えるのももつたいなくて時方はその夕方から宇治へ出かけた。この人たちが急いで行けば早く行き着くこともできるのであった。少し降っていた雨はやんだが泥^ぬ濘^{かる}の路^{みち}につかれていたし、はじめから侍風に装っていたのであるし、目だつこともなく門をはいることのできた山荘の中は混雑していた。今夜のうちにお葬儀をしてしまう

のであるなどと皆の言っているのを聞いて時方はひどく驚かされた。右近に面会を求めたが逢えない。

「何が何やらわからぬふうになっていまして、起き上がる力もないのです。夜分おそくにでもなりましたらおいでくださいませ。

お目にかかれませんかのは残念でございます」

と取り次ぎをもつて言わせた。

「そうではありましようが、こちらの御事情がわからぬままでは帰りようがありません。もう一人の方にでも逢わせてください」

時方がせつに言ったために侍従が出て来た。

「とんだことになりました、だれも想像のできませんようなふう

でお亡なくなりになったものですから、悲しいなどと申す言葉では
私どもの心持ちは出てまいりません。夢のように思ひまして、だ
れも皆呆然ほうぜんとしておりますとだけ申し上げてくださいませ。少し
こうしました気持ちの納りますころになれば、その前にどんなに
煩悶はんもんをしておいでのになりましたかと申すことや、あの宮様のおい
であそばした晩に心苦しく思召おほしめした御様子などもお話し申し上げ
ることができるかと思ひます。触穢しよくえの期間の過ぎました時分にも
う一度またお立ち寄りください」

と言つて侍従ははげしく泣く。奥のほうにも泣き声が幾いろに
も聞こえて、乳母らしく思われる声で、

「お姫様どこへいらっしやいました。帰っておいでくださいませ。御遺骸いがいさえ見られませんかとはなんたる悲しいことでしょう。毎日毎日拝見しても飽くことのないあなた様でした。そのあなた様の御幸福におなりになるのを祈りますことで生きがいがあった私ではございませんか、それにあなた様は打ちやっってお行きになりました、どこへ行ったとも知らせてくださらない。鬼神でもあなた様を取り込めてしまうことはできないはずです。人が非常に惜しむ人は帝釈天たいしゃくてんも返してください。お姫様を取ったのは人にもせよ鬼にもせよ返しに来てください。御遺骸だけでも見せてほしい」

こう叫んでいるうちに不審な点のあるのに気のついた時方は、
「真相を知らせてください。だれかがお隠しになったのですか。

確かに知りたく思召して、御自身の代わりにおよこしになった私は使いです。今ははつきりしないままでも事は済むでしょうがあとでほんとうのことがお耳にはいった節、御報告が違っていたものでしたら使いの罪になります。まただれだれに逢えと、御好意を持つものと思召して御名ざしになったのに対しても相済まぬこととお思いになりませんか。一人の女性に傾倒される方は外国の歴史などにもありますが、宮様のあの方への御熱愛ほどのものはこの世にもう一つとはないと私は拝見しているのです」

と言った。道理なこと、この場合の宮の御感情はさもこそと
恐察される、隠しても姫君の普通の死でない噂は立つことである
うから、今申し上げておくほうがよいと侍従は思い、

「だれかがお隠ししたかという疑いも起こることでしたなら、こ
んなふうに家じゅうの人が悲しみにおぼれることもないでしょ
う。お悲しみになってめいっただふうになっていらっしやいました
ころに、殿様のほうから少しめんどうなふうの仰せがあったので
す。お母様である方も、あのわめいております乳母なども初めか
らの方へ迎えられておいでになりますこと用の意に夢中でした
し、宮様のお志に感激しておいでになりました姫君の思召しはま

た別でしたから、それでお頭つむりが混乱してしまっただけでしょう、思
いも寄らぬことになりました。心身ともに失っておしまいになった
ので、あの乳母のようなむちやな叫びもされるのですよ」

さすがに正面から言おうとはせずほのめかしていることのあるのを内記も知った。

「それではまたお静かになってから改めて伺いましょう。立ちながらの話にしてはあまりに失礼なことになります。そのうち宮様御自身でもおいでになることになりましたよう」

「もったいない、それはいけません。今になりましたっていつさいの秘密の暴露してしまいますことは、お亡なくなりになりました方の

ためにあるいは光栄なことかも存じませんが、十分隠したく思召したことですから、秘密は秘密のままにしてお置きください。ほうが御好志になります」

などと侍従は言い、姫君の最後が普通の死でないことをほかへ洩もらすまいとしていても、自然に事実として人が悟もってしまふことであろうと思ひ、こんな会談を長くしていることも避けねばならぬと思ふ心から時方を促して去らしめた。

雨の降る最中に常陸ひたち夫人が来た。遺骸ひたがあつての死は悲しいといつても無常の世にいては、どれほど愛あしていた人でもある時は甘んじて受けなければならぬのが人生の掟おきてであるが、これは何と

思いあきらめてよいことかと悲しがった。苦しい恋の結末をそうしてつけたことなどは想像のできぬことで、身を投げたなどとは思い寄ることもできず、鬼が食ってしまったか、狐きつねというようなものが取って行ったのであろうか、昔の怪奇な小説にはそんなこともあるがと夫人は思うのであった。また常に恐れている大将の正妻の宮の周囲に性質の悪い乳母というような者がいて、薰かおるが浮舟をここへ隠して置いてあることを知り、だまして人につれ出させるようなことがあったのではあるまいかと、召使いに疑いをかけて、

「近ごろ来た女房で気心の知れなかったのがいましたか」

と問うた。

「そんなのはあまりにこちらが寂しいと申していやがりまして、辛抱しんぼうもできませんで、京へお移りになればすぐにまいりますといふような挨拶あいさつをしまして、仕事などだけを引き受けて持って帰ったりしまして、現在ここにいるのはございません」

答えはこうであった。もとからいた女房も実家へ行っていたりして人数は少ない時だったのである。侍従などはそれまでの姫君の煩悶を知っていて、死んでしまいたいと言って泣き入っていたことを思い、書いておいたものを読んで「なきかげに」という歌も硯すずりの下にあったのを見つけては、騒がしい響きを立てる宇治川

が姫君を呑^のんでしまったかと、恐ろしいものとしてそのほうが見られるのであった。ともかくも死んでおしまいになった人が、どこへだれに誘^{ゆう}拐^{かい}されて行っているかというように疑われているのは気の毒なことであると右近と話し合い、あの秘密の関係も自発的に招いた過失ではないのであるから、親である人に死後に知られても姫君として多く恥じるところもないのであると言い、ありのままに話して、五里霧中に迷っているような心境をだけでも救いたいと夫人を思い、また故人も遺骸を始末するのが世の常の営みなのであるから、そのまま空で悲しんでばかりいることをしていては日が重なるにしたがい秘密は早く世の中へ知られてしまう

ことでもある、その体裁も相談して作るほうがよい、どうしても
真実を母夫人に知らす必要があるとして、ひそかに兵部卿の宮と
の関係、そのうち大将に秘密を悟られて姫君が煩悶した話をする
のであったが、語る人も魂が消えるようになり、聞く人もさらに
予期せぬ悲哀の落ち重なってきたふためきをどうすることもでき
ないふうであった。それではこの荒い川へ身を投げて死んだのか
と思うと、母の夫人は自身もそこへはいってしまった気が覚え
た。流れて行ったほうを捜させて遺骸だけでも丁寧に納めたいと
夫人は言いだしたが、もう大海へ押し流されたに違いない、効果
は収めることができずに人の噂だけが高くなることははばからな

ければならぬことを二人は忠告した。どうすればよいかと思うと胸がせき上がってくる気のする常陸夫人は、どうと定めることもできずに茫ぼつとしているのを二人がたすけて、車を寄せさせて姫君の常に坐ざしていた敷き物、身近に置いた手道具、もぬけになつていた夜具などを入れ、乳母の子の僧と、その叔父おじにあたる阿闍あじゃ梨り、そのまた親しい弟子でし、もとから心安い老僧などで忌中を籠こもろうとして来ていた人たちなどだけに真実のことを知らせ遺骸のあつてする葬式のように繕つくろわせて出す時、乳母は悲しがつて泣き転まろんだ。宇治の五位、その舅しゅうとの内舎人うちとねりなどという以前に嚇おどしに来た人たちが来て、

「お葬式のごことは殿様と御相談なすってから、日どりもきめてりっぱになさるのがよろしいでしょう」

などと言っていたが、

「どうしても今夜のうちにしたい理由わけがあるのです、目だたぬようにと思う理由もあるのです」

と言い、その車を川向かいの山の前の原へやり、人も近くは寄せずに、真実のことを知らせてある僧たちだけを立ち合わせて焼いてしまった。火は長くも燃えていかなかった。田舎いなかの人はこうした作法はかえって都人より大事にするもので、そしてこの場合の縁起を言ったりすることもうるさいほどにするものであったか

ら、大家の夫人の葬儀とも思われぬ貧弱な式であつたと譏^{そし}る人があつたり、また側室であつた人の場合はこんなふうにして済まされるのが京の風俗であるなどと言つたり、いずれにもせようれしくない取り沙汰^{ざた}を人はした。そうした階級の人がどう思ったかということさえもつつましいこの場合に、大将が遺骸も残さず死んだと聞いては必ずどこかへ失踪^{しっそう}をしてしまったことと疑うであるうし、親族関係の濃い宮様のほうへその話の伝わってゆかぬはずもない、その時に宮がお隠しになつたと大将は思うまい、どんな人が隠しているかと思ひ想像もされるに違ひない、生きていた間は高い貴人たちに愛される運命を持った人が、死後に醜い疑いを

かけられるのはもつてのほかであると女房らは思い、山荘の中の下人たちにも今朝けさ姫君の姿の見えなかつた騒ぎに、思わずも実相を悟らせることになつた者らへは口堅めを嚴重にし、知らなかつたのにはあくまでも普通の死であつたように取り繕うことに侍従と右近は骨を折つた。時間がたつたのちには浮舟の姫君が死を決意するまでの経過を宮へも大将へもお話しすることができようが、今は興ざめさせるような死に方を人の口から次へ次へと聞こえることは故人のために気の毒であると思い、この二人が自身らの責任を感じる心から深く隠すことに努めた。

この時に薰は母宮が御病気におなりになつて石山寺へ参籠さんろうをあ

そばされるのに従って行っていて騒がしく暮らしていたのであった。京よりもまだ遠くにいて宇治のことが気がかりでならぬ薫でもあったが、はかばかしく消息をする人もなかったために、葬儀にも大将家の使いの立ち合わなかったのは山荘の人々の情けなく思うところであつたが、莊園の人が石山へ行ってはじめて姫君の死は薫へ報じられたのであつた。使いはその翌日の早朝に宇治へ来た。

非常なことの起こつたしらせを受け、すぐにも自分で行くべきですが、母宮の御病気のために日数をきめて籠こもっているために、それも実行ができません、昨夜にもう葬送を行なつたとい

うことですが、なぜそれは私へ相談をしませんでしたか、そして日を延べることが普通ではありませんか。しかも簡単に儀式をしてしまったと聞いて残念に思います。どうしてもこうしても同じことですが、一人の人間の最後の式ですから、田舎いなかの人たちの譏そしりを受けたりすることになっては、自分のためにも迷惑です。

と、あの親しく思っている大蔵大輔たゆうを使いにして言わせたのであった。使いの来たことでまた悲しみが新しくなったし、答える言葉も何と言ってよいかわからぬ時であってみれば、人々は泣くのを挨拶あいさつに代えて何とも申し出すことはできなかつた。

薫は思いがけぬ愛人の死に落胆をして、情けない場所である、幽鬼などが住んでいてそうした災厄さいやくをしばしば起こすのでなかるうか、それと気もつかずにどうして長く宇治などへ置いていたのだろう、不快な関係がほかに結ばれたらしいことなども、ああした不用心な所へ住ませておいたために隙すきをうかがわせることになったに違いない、と思われるのも皆自分の非常識に原因したことでであると胸が痛くなるほどにも悔まれた。御病気で専念に仏へ祈っておいでのなる母宮のおそばでこんな煩悶はんもんをしているのはよろしくないと思ひ薫は京の邸やしきへ帰った。夫人の宮のところへは行かずに、

「たいしたことではないのですが、身に不幸が起こったものですから、しばらく落ち着きますまで、縁起の悪いことにもなりま
すから謹慎していようと思います」

などと御挨拶をしておいて、一人で人生の深い悲しみを味わっ
ていた。浮舟つぎふねの容姿の愛嬌あいぎやうがあつて、美しかったことなどを思い
出すと、非常に恋しくなり、悲しくなる薫は、その人の生きてい
た時には、それをそうと認めようとはせずに、たびたび逢いに行
こうともせず、寂しい思いばかりをさせて来たのであろうと思う
後悔があとからあとからわいてくる。恋愛について物思いの絶え
ない宿命をになっっている自分である、信仰生活を志していながら

俗から離れずにいるのを仏が憎んでおいでになるのであるのか、悟らせようとしての方便には未来の慈悲を隠してこんな残酷な目も仏はお見せになるものであると、思い続けて仏勤めをばかりしていた。

浮舟をお失いになった兵部卿の宮は、まして二、三日は失心したようになっておいでになったため、どうした物怪ものけが憑ついたかと周囲の人たちが騒いでいるうちに、ようやく涙が流れ尽くしてお心が静まってきたと同時に、生きていた日の浮舟が恋しくばかりお思い出されになるのであった。他人には重く病気をしているふうを見せて、亡なき恋人を思う悲歎に沈んでいることは知らせない

でいるのであると、御自身では思召したが、自然御様子にそれが現われるものであるから、どんなことにお出逢いになって、こんなに命もあぶないまでに悲しんでおいでになるのであるろうという人もあるために、大将もそれを知り、故人とは自分の想像したような関係を作っておいでになったらしい、手紙をおやりになったりするだけのことではないのであった、宮が御覧になれば必ず深い愛着をお覚えになるはずの人であった、生きていたならば自分は裏切られた男としての醜名を取らなければならなかったのであったと、こう思うようになってからは少し故人へのあこがれがさめた気のする薫であった。

兵部卿の宮の御病氣見舞いに伺候せぬ人もなく、世間の騒ぎにもなっている場合であるのに、たいした喪というわけでもないのに、自分がお見舞いにならないのも僻見をいだいているように見られることであろうからと思い、薫は二条の院へ伺った。この時に式部卿しきぶぎょうの宮と言われておいでになった親王もお薨かくれになったので、薫は父方の叔父おじの喪に薄鈍色うすにびの喪服を着けているのも、心の中では亡き愛人への志にもなる似合わしいことであると思っていた。顔は少し瘦やせていよいよ艶えんに見えた。お見舞い客が皆去ったあとの静かな夕方であった。

宮は御病氣らしくお見えにはなっても、ただお気持ち重く沈

んでしかたがないという御状態にすぎないのであったから、うとうとしい人とは御面会にならぬが、お居間の中へ平生はお通しになる御親交のある人たちとはお逢いになるのであったから、薫を御引見になったが、その人の顔を御覧になると理由もなく恥ずかしくお思われになり、心弱くなっておいでになるのが隠しきれぬような涙になって出るのをきまり悪く思召しながらも、よく心持ちをお抑えおさになり、

「たいした病気ではありませんが、だれもが悪くなつてゆく兆候のある容体だと言って騒ぐものですから、お上も中宮様かみも御心配ちちゅうぐうあそばされるのが苦しく思われてね。それにつけてもまた人生の

心細さが感ぜられてなりませんよ」

こうお言いになり、ちよつと袖そでで押すほどに拭ぬぐうてお済ませになるつもりでおありになった涙が、どうしたかともめどもなく流れ落ちるのを、見苦しいと思召すのであるが、浮舟のために泣くとは大将に気のつくはずもなからう、ただ人生にめめしく執着をしていると見えるだけであろうと、薫の心中を御推測のできぬ宮は思っておいでになった。やはり恋人の死ばかりを悲しんでおいでになるのであった、いつごろからあった事実なのであるう、自分を滑稽こっけいな男と長い間笑っておいでになったのであるうと思ひ、薫は悲しみもそれですべて忘れることができているのを宮は御覧になり、

死んだ愛人に対して非常に冷淡なものである、ものの痛切に悲しい時には全然関係のないことにさえ涙が誘われ、空を鳴いて通る鳥の声にも哀傷の思いは催されるはずではないか、自分が何の悲しみによって病んでいるかを知ったなら、同情から平気には見ておられぬ人なのであるが、人生の無常を深く悟り澄ました人はこんなにも冷静なふうでいられるのである。とうらやましく、御自身の及びがたさをお覚えになるのであるが、「我わぎもこ妹子が来ては寄り添まきばしふ真木柱まきばしそも睦むつまじやゆかりと思へば」という歌のように、あの人を愛した男であるとお思いになるとこの人にさえ愛のお持たれになる兵部卿ひょうぶけいの宮であった。この人とある日は向かい合っ

たのかとお思いになると、形見であるというように薫の顔がお見守られになった。いろいろな世間話を申しているうちに、絶対に浮舟のことは言いださぬという態度はお取りしたくないと思い、

「私は昔からどんなこともあなた様に申し上げないで、自分だけで思っているのがとても苦しいのではございますが、今では知らぬまに私のような者も大官になっておりますし、ましてあなた様はいろいろとお忙しい身の上でお閑暇ひまなどはありますまいと存じまして、宿直とのいなどをいつでも申し上げて話を聞いていただくようなこともできませず日を過ごしておりますが、こんなことをひとつお聞きください。昔も御承知のあの山里に若死にをしました

恋人と同じ血統ちすじの人が意外な所に一人いると聞きました、昔の人の形見にときどき顔を見て慰めにしようと思ったのですが、ちよ
うど私といたしましては、そんなことをしては、世間からわけも
なく悪く批評をされる時だったものですから、昔の寂しい山里へ
つれて行ってあったのでございます。そして始終は訪ねたずて行って
やることもない間柄になっていましたし、その人も私一人にたよ
る心もなかったように見えました、唯一の妻としては、そうし
た不純な心のあることは捨ておけないことですが、愛人としてお
くぶんには許されなくはないものですから、可憐かれんに見ておりまし
たが突然亡なくなったのでございます。人生の悲哀がまたしみじみ

と味わわれまして、寂しい思いをしております。もうそのことはお耳にもどちらからかはいつておりますでしょう」

と言つて、この時になつて泣き出した。薰^{かおる}としてもこれほど悲しむふうはお見せすまいと自戒していたのであつたが、こぼれ始めてはとどめがたい涙になつた。その様子に別な意味もあるふうなのを宮もお悟りになり、気の毒に思召したが、素知らぬふうをあそばした。

「御愁傷をお察しします。そのことは昨日ちよつと聞いたのでした。御弔問をしたく思いましたが、秘密にしておありになるのだとも聞いたものですから」

言葉少なにこうお言いになった。長く言うに堪えがたいお気持ちになっておいでになったのである。

「お目にかかけましたら興味をお覚えになりますだけの価値のある女性でしたが、それは私の思いますだけでなくあなたの奥様のほうの縁故のある人でしたから、もう顔など知っておいでになったかもしれません」

などと少しほのめかして薫は、

「御病気中はうるさい世の中のことなどをお耳に入れましては御安静をお妨げすることになってもよろしくございません。よく御養生をなさいますし」

と申して辞し去った。非常に悲しがっておいでになった、故人を哀れな存在とは見たが、現在の帝王と后きさきがあれほど御大切にあらばされる皇子で、御容貌よつぼうといい、学才と申して今の世に並ぶ人もない方で、すぐれた夫人たちをお持ちになりながら、あの人に心をお傾け尽くしになり、修法、読経どきよつ、祭り、祓はらとその道々で御恢復かいふくのことに騒ぎ立っているのも、ただあの人ひとの死の悲しみによつてのことではないか、自分も今日の身になっていて、帝みかどの御女すめを妻にしながら、可憐かれんなあの人を思ったことは第一の妻に劣らなかつたではないか、まして死んでしまった今の悲しみはどうしようもないほどに思われる、見苦しい、こんなふうにはほかから

見られまいと忍んでいるのであるがと薫は思い乱れながら「人非ひとほくせ木石皆有情きにあらずみなつじやう、不如不逢傾城色しかずけいせいこのいろにあはざるに」と口ずさんで寢室にはいった。葬儀なども簡単に済ませたことを宮も飽き足らず思召したことであろうと哀れに思われて、母の身分がよろしくなくて、異父の弟などが幾人も立ち合ってなどとあとに言われることを避けて急いでしたのであろうがと不愉快に薫は思った。くわしい様子も聞かないでいることも物足らず思われ、自身で宇治へ行ってみたいと思うのであるが、喪の家へそのまま忌の明けるまで籠こもっているのも自分としてははばかられる、行くだけ行ってすぐに帰るのも心苦しいことであると思おもだえていた。

月が変わって、今日は宇治へ行ってみようと薫の思う日の夕方の気持ちはまた寂しく、橘たちばなの香もいろいろな連想れんそうを起こさせてなつかしい時に、杜鵑ほととぎすが二声ほど鳴いて通った。「亡なき人の宿に通はばほととぎすかけて音ねにのみなくと告げなん」などと古歌を口にしたままではまだ物足らず思われ、二条の院へ兵部卿の宮の来ておいでになる日であったから、橘の枝を折らせて、歌をつけて差し上げた。

忍ねび音や君も泣くらんかひもなきしでのたをさに心通はば

宮は中の君の顔の浮舟によく似たのに心を慰めて、二人で庭をながめておいでになる時であった。言外に意味のあるような歌であると宮は御覧になり、

橘にほの匂にほふあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ

なんだかかかりあいのあるようなことが言われますね。

とお返事をあそばした。宮と浮舟の姫君の関係もまたその人の死も何に基因するかも今は皆わかってしまった中の君は、姉によの女王おうも妹の姫君も物思いがもとで皆若死にをしたあとに、自分だけ

が残っているのは感情の鈍い質であるからであろうか、それと
いってもいつまでも生きていられることかと心細く思った。宮も
隠してお置きになっても、いずれは知れてしまうことであるの
に、隔てを置いたままでは苦しいことであると思召して、
浮舟との関係を少しは取り繕って夫人へお話しになった。

「だれであるのかをあなたがどこまでも隠そうとしたのが恨めし
かったために反発的にそんなことにまで進んでしまったのです
よ」

など、泣きも笑いもしながらお語りになる相手が、恋人の姉で
あることにお慰みになるところも多かった。形式が簡単でなく、

ちよつとお身体からだの悪いことのあつても騒ぎがはなはだしくなり、見舞いに集まる人も多く、父の大臣、その息子たちむすこと絶え間なしに病床に付き添っているようなところと変わり、二条の院においてになることは気楽でなつかしい気分を十分お得になられることであつたのである。浮舟の死んだことはまだ夢のようにばかりお思われになり、どうして急にそうなたかという不審がお解けにならぬため、例の内記たちをお召しになり、右近を呼びにおつかわしになつた。

母の常陸夫人も宇治川の音を聞くと自身も引き入れられるような悲しみが続くために困って京へ帰って行つた。念仏の役を勤め

る僧だけが頼もしい人のようなかすかな家と見えだが、内記がは
いって行っても、人が来るとすぐに外を見まわりに来るような宿^{との}
直^いの侍もない。今はこうであるのに、あの最後の時にだけはこん
な者たちが妨げて宮をお入れしなかったと時^{とき}方^{かた}らは思い出して悲
しんだ。それほどまでに悲しみにお^{おほ}溺れにならずともよいではな
いかと、常は非難がましく宮をお思いしている人たちであるが、
ここへ来て見ると、あの無理をして通っておいでになったあの場
合、その場合が思い出され、宮にお抱かれして船に乗った方の美
しかったことなどを思い出すと、だれも心強くなっておられる者
はなくなつて皆泣いていた。

右近が出て来て非常に泣くのももつともなことと思われた。宮がこういう思召しで迎えのために自分らをおつかわしになったということを語ると、今になって他の女房たちからも怪しいことと言われ、思われするであろうことが苦しく考えられて、

「まいりましてもよくわかりいただきまますほどな細かなお話がまだできます自信がございません。お四十九日が済みましたあとで、ちよつと外へまいると申すような体裁を作りましても不自然でないころになりました時、私はもう生きても居られない気はいたしますものの、まだ生き延びておられましたなら、お召しがございませんでも伺いまして、ほんとうに夢のようでございました

悲しいお話も申し上げたいと思います」

と言い、今は動きそうにもない。内記も泣いて、

「私は何も細かい御関係のことまでは知らないのですし、事情もわかりませんが、宮様がどんなに深い愛をお持ちになりましたかということだけは存じ上げていたものですから、あなたがたとも急いで御懇意にならずとも、しまいには御主人としてお仕えする方についておいでになる方と思ひまして呑のん気きにして来たのですが、お亡かくれになつてはじめてあなたがたにもいろいろと御心配をお掛けしたことが相済まぬ、あなた様はよくお尽くしく下さいましたと感謝の念でいっぱいになりました」

などと言っていた。

「車も宮御自身でお指^{さし}図^ずになってお持たせになったのですから、あき車をまた引かせては帰れません。もう一人の方でも来てくださいませんか」

と内記が言うので、右近は侍従を呼び、

「あなたが伺ってください、私の代わりに」

と言った。

「あなたでさえもお話を申し上げる自信が持てないのに、私にどうしてそれができましよう。それにしましても忌中の者がお邸^{やしき}へまいたりすることは縁起の悪いことではございませんか」

「御病気のためにいろいろなふうに御謹慎をなさらねばならなくなつていらつしやいますが、そんなこともかまっておいでにならない御様子なのです。また考えてみますと、あれほどお愛しになつた方のためには宮様御自身がおこもりになつてもよろしいわけなのですからね、もう忌の残りが幾日もあるのではないのですから、ぜひお一人だけは来てください」

内記がこう責めるので、侍従も宮の御様子をおなつかしく思い出している心から、もう一度お目にかかりうる機会などというものはありえないことであるから、こうした時にでもと願うようになり、まいることにした。黒い服ながら引き繕つて着た姿はきれ

いであつた。裳もは現在では主人のいない家であつたから喪の色の
も作らなかつたため、淡紫つすむらじなのを持たせて車に乗つた。姫君がおい
でになつたなら、宮にこうして迎えられておいでになつたである
う、自分はその時にお付きして行こうと心にきめていたのであつ
たがと思ひ出すのは悲しかった。途中をずっと泣きながら侍従は
二条の院へまいつた。

兵部卿の宮は侍従の来たしらせをお受けになつても身にしむよ
うにお思われになつた。夫人へは恥ずかしくてお話しにはならな
かつたのである。宮は寢殿のほうへおいでになり、その廊のほ
うへ車を着けさせて侍従を下おろさせになつた。

浮舟うきふねのことをくわしく聞こうとあそばすと、そのずっと前から

煩悶はんもんをし続けていたこと、その前夜にひどく泣いたことなどを言

い、

「怪しいほどお口数の少ない方で、内気でいらっしやいましたから、遺言らしいことは何もなさいませんでした。夢にも自殺などという強いことのおできになるとは思われませんでした」

などと侍従が話すことによって、宮はいっそうお悲しみが深くなり、命数が尽きて死んだということよりも、どんなに物思いを多くして恐ろしい川へなど身を投げたのであろうと御想像あそばすのが苦しく、その時に見つけることができたとどめえたならば

と、沸きかえるような心持ちにおなりになるのであるが、今ではすべてむなしいことであつた。

「あのお手紙を始末してお焼きになりました時に、なぜ私らの頭が働かなかつたのでございましょう」

と侍従は言つたりして、夜の明けるまで語つても語り足りないというふうであつた。寺からもらつた経巻へ書いて母君の返事にした歌のことなどもお話しした。侍従などは何とも宮の思つておいでにならなかつた女であつたが、哀れに思召すために、

「自分の所にいるがよい。あちらにいる奥さんもあの人には他人でなかつたのだから」

と仰せられたが、

「そうしてお仕えさせていただきましては何も何も悲しいことになりましょう。ともかくもお忌を済ませましてから、どうとも身の振り方を考えます」

侍従はこう申し上げた。

「また来るがいい」

こんな人とすらも別れるのを悲しく宮は思召した。浮舟のために作らせておありになった櫛くしの箱一具、衣裳箱いしやう一つを宮は贈り物にあそばした。その人のためにお設けになった物は多かったのであるが、これはただ内記に託しておこしらえになっただけのもの

であった。

突然山荘を出て来て、こうしたいただ戴き物をして帰っては他の人々が何と思うであろう、少し困ったことであると侍従は思ったのであるが、御辞退のできることもなかった。

宇治へ帰った侍従は右近と二人でひそかに櫛の箱と衣箱の衣裳をつれづれなままにこまごまと見た。はなやかなきんしゅう錦繡の服と精巧な作の箱、その中の小箱を見ながらも二人は非常に泣いた。喪にこもっている自分たちはこれをどう隠しておればいかということにも苦心を要した。

薫も思い余って宇治へ行くことにした。途中からもう昔のこと

がいろいろと胸へ集まってきた、どんな因縁で八の宮の所へ自分
は行き始めたのであろう、二人の女王に失恋をして、父宮から子
とも認められなかった人にまで縁が生じ、この一家との結ばれに
よって物思いばかりを自分はし続ける、尊い悟りをお持ちになっ
た方へ仏の導きで近づき、未来の世界での交わりを約していなが
ら、女王に心を引かれ始めて、信仰をよそにした報いを受けるの
であろうと、こんなことも思われた。

大将は右近を前に呼んで話そうとしたが、悲しみが先に立ち
はかばかしい質問もできない。

「もう忌の残りの日も少なくなっただから済んでからと思っ

が、どうしても待ちきれないものがあって来た。どんな病状でにわかにあの方は死ぬようになられたか」

と問われ、右近は弁の尼なども姫君の遺骸のなくなっていたことは気どっているのであるから、隠してもしまいには薫の耳にはいることに違いない、かえってことを蔽おおおうとして誤解を招くことになつては姫君が気の毒である、あの不始末を処理するためにはいろいろな嘘うそも言われたのであるが、このまじめな人に対しては、今までも逢あつた時にはこうも弁解しああも言つてと考へていたことは皆忘れてしまい、嘘は恐ろしくなり眞実の話をした。これは薫の想像にもものぼらなかつたことであつたから、驚きのため

にしばらくはものも言われなかった。それを真実とは信じがたい、普通の人が煩悶はんもんをしたり、悲しんだりする場合にも多くは口に言わずおおようにしていた人にどうしてそんな恐ろしいことが思い立たれるか、そのほかの事実を自分へこう取り繕って言うのではなかろうかと、いつそう心の乱れてゆくのを覚える薫であったが、しかしあの人をお隠しになったようでもなく宮が悲しんでおいでになったことは著しいことであつたし、この家の様子も、死が作り事であれば自然に気配けはいが違っているはずであるのに、自分の来たのを見ると人は上から下まで集まって来て泣き騒いでいるではないかと考え、

「奥さんといっしょに行ってしまった人があるか、もつと詳細にその時のことを言ってくれ。私に誠意がないからほかへ行つてしまふ氣にあの人になつたとは思われぬ。何もなくてにわかになんなことができるか、私は信じることができない」

と言つた。予期した詰問であると右近は恐れた。

「もうおわかりになつていらつしやいましたでしょうが、宮様の姫君としてお育てられになつたのではございませんでしたから、心でいろいろ御苦勞をなされた方でございます。それが寂しいお住まいをなさることになりましたからはいつからともなく物思いをなさいますことになりましたのですが、たまさかにもせよあな

た様がおいでになります時のお喜びで過去の不幸も御自身でお慰
めになりながらも始終お逢いあそばすことができますような日の
出現を、口に出してはおっしゃいませんでしたが始終そればかり
待っておいでになったふうでございました。ようやくそのお望み
のかないます御様子と私どもにもうかがえますことがございまし
て、うれしく存じて御用意にかかっておりまして、常陸守ひたちのかみの奥様
もやっとお喜びになることができた御様子でお仕度したくのことなどを
あちらからもいろいろとお世話をしていらっしゃいましたところに
なりまして、姫君には御合点のゆかぬような御消息がございまし
たそうで、それと同時に宿直とすのいをいたしている侍たちが女房の中に

品行の修まらぬ者があるとか京のお邸やしきで申されたとか言いだしま
して、ものの理解のない田舎いなかの人が無遠慮なことをよく言っ
てま
いたりすることになりますし、あなた様から久しくおたよりも
ございませんことなどから、自分は薄命なものだと小さい時から
知っていたのを、人並みの幸福を得させようと心を砕いておいで
になる母君が、また今になって自分が世間の笑われものになった
りしては、どんなに力を落とすだろうと、こんなお心持ちをそれ
となく私どもへ始終言ってお歎きになりました。それ以外に何が
あるかと考えましても、何も思い当たることはございません。鬼
が隠すことがありましても片端くらいは残すでしょうのに」

と言って右近の泣く様子は、見ていても堪えられなくなるほどのものであったから、宮との例の恋愛の事実は無根でないらしいと悟った時から少し紛れていた薫の悲しみがよみがえり、せきあえぬふうにかこの人も泣いた。

「自分の身が自分の思っているとおりにはできず、晴れがましい身の上になってしまったのだから、逢って慰めたいという心の起こる時も、そのうち近くへ呼び寄せ、家の妻にも不安を覚えさせないようにしてから、長い将来を幸福にしたいと、自分をおさえてきたのを、誠意がなかったように思われたのも、かえってあの人に二心があったからではないかという気がされる。もうそんな

ことは言わずにおこうと思っただが、だれも聞いていないのだから
事実を私に聞かせてくれ、それは兵部卿ひつじやうけいの宮様のことだ。いつご
ろからのことだったのか、恋愛の技術には長じておいでになる方
だから、女の心をよくお引きつけになって、始終お逢いできぬ歎
きがこうさせておしまいになり、命もなくしたのではないかと思
う。隠さずに真実を言ってくれ。自分に少しの欺瞞ぎまんもないことを
言っほしい」

と薫かおるの言うのを聞いて、確かなことを皆知っておしまいになっ
たようである、この方もお気の毒であるし、故人もおかわいそう
であると右近は思った。

「情けないことをお聞きあそばしたものでございますね。右近がおそばにおらぬ時とってはございませんでしたのに」

と言い、右近はしばらく黙っていたが、

「そんなこともお聞きになっていらっしやいましょうが、お姉様の二条の院の奥様の所へ行っておいでになりました時、思いがけずそのお部屋へやへ宮様がお見えになったことがあるのでございますが、失礼なことも皆でいろいろ申し上げましてお立ち去りを願ったのでございました。実はそれを恐ろしいことに思召して、あの三条の仮屋かりやのような所にしばらくお住いになったのでございます。それから決してお在処あつかをお知らせしますまいと警戒をいた

しておりましたのに、どういたしましたことか今年ことしの二月ごろからおたよりがまいるようになりました。お手紙はたびたび書いたのですが、丁寧にお頼みになることもございませんでしたのを、もったいないことで、そうしてお置きになりますことはかえって悪い結果を生みますと私などがお勧めいたしましたので、一度か二度はお返事をあそばしたことがあったようでございます。それ以外のことは何もございません」

こう言った。そう言うべきことである、しいてそれ以上を聞くのもこの人がかわいそうであると薫は思い、じつとひと所をながめながら、宮をお愛ししたのであるが、自分をもおろそかには

思えなかつたらしい、迷い迷って死におもむいたのであろう、自分がかうした寂しい場所へさえ置かなんだならば、世の中の波にもまれることはあつても、自殺までもすることはなかつたであろうと思つと、この川があつたがために悲しい結末を見ることになつたのであると、宇治の流れを憎く思う薫であつた。恋しい人の縁で荒い山路やまみちを往復ゆきかえりすることを何とも思わなかつた薫は、この時になつて宇治という名を聞くことさえいやであるように思つた。宮の夫人があゝの姫君のことを初めに戯れて人型ひとがたと名づけて言つたのも、川へ流れてゆく前兆を作つたものであつたかと思つと、何にもせよ自分の軽率さから死なせたという責任も感じられ

た。母の現在の身分が身分であったから、葬式なども簡単にしてしまったのであろうと不快に思ったこともくわしく聞いたことによつて、そうした想像をしたことが気の毒になり、母としてはどんなに悲しがっていることであらう、あの身分の母の子としてはりっぱ過ぎた姫君であつたのを、陰のことは知らずに自分との縁により、姫君が煩悶をしたこともあつたとして悲しんでいることかもしれぬなどと同情がされるのであつた。穢けがれというものはこの家にないはずであるが、供の人たちへの手前もあつて家の上へは上がらず車の榻しじという台を腰掛けにして妻戸の前で今まで薫は右近と語っていたのである。これを長く続けているのも見苦しく

思われて茂った木の下の苔こけの上を座にしてしばらく休んでいた。
もう山荘に来てみることも心を悲しくするばかりであろうから、
今後来ることはないであろうと思い、その辺を見まわして、

われもまたうきふるさとをあれはてばたれ宿り木の蔭かげをしの
ばん

こんな歌を口ずさんだ。

以前の阿闍梨あじやりも今は律師になつていた。その人を呼び寄せて浮うき
舟ふねの法事のことを大将は指図さしずしていた。念仏の僧の数を増させる

ことなども命じたのであった。自殺者の罪の重いことを考えてその滅罪の方法も大将はとりたい、七日七日に経巻と仏像の供養をすることなども言い置いて、暗くなつたのに帰って行く時、あの人がいなければ今夜は帰ることではないのであると悲しかった。尼君の所へ人をやつたが、

「私と申すものが凶事のしるしのように思われまして、心をめいらせておりますこのごろは、以前よりもいっそうぼけてしまひまして、うつ伏しに寝やすんだままでおります」

と言ひ、話しに出てこなかつたので、しいて逢おうとは言わなかつた。

途みちすがら薫は浮舟を早く京へ迎えなかつたことの後悔ばかりを
覚えて、水の音の聞こえてくる間は心が騒いでしかたがなかつ
た。遺骸だけでも捜してやることをしなかつたと残念でならない
のであつた。どんなふうになつてどこの海の底の貝殻かいがらに混じつて
しまつたかと思うと遣瀬やるせなく悲しいのであつた。

常陸夫人は京に産をする娘のあるために潔斎潔斎ときびしく言
われる家へははいれないで、他のところにおいて悲しみの休む間ひまも
ないのである、その娘もまたどうなることかと不安だつたがそれ
は安産した。穢けがれがあつてはこれも見に行くことができないので
ある、そのほかの子供たちのことも皆忘れたようになり、茫然ぼうぜんと

している時に右大将からそつと使いが来て手紙をもらった。ぼけている心にもそれはうれしかったが、また悲しくもなった。

思いがけぬ不幸にあい、まずあなたに悲しみを訴えたいと思つたのですが、心が落ち着かず、また涙に目も暗くなる気がして実行はできませんでした。ましてあなたはどんなに悲しんでおいでになることだろう。涙に沈んでおいでになることだろうと思いますと、手紙をあげてもお読みにはなれまいと遠慮も申しているうちに日がずんずんとたちました。人生の常なさがことごとくに形となつてわれらをおびやかします。この悲しみにも堪える力の許されて、私が生きていましたなら、故人の縁のあつ

た者として何かのことは御相談もしてください。

などどこまやかな心で書かれたものだった。使いにはあの大蔵たゆう大輔が来たのである。

「すべてを気長に考えていたものですから、かなり月日はたつていても、必ずしも私を誠意のある婿とは思ってくださらなかったでしょう。しかし今は何につけてもあなたの御一家のことは念頭に置いて忘れますまい。またそのように内々信じてくださって、お力になるものと思っていてください。小さい息子むすこさんたちもあるようですが、仕官をおさせになる場合には必ず後援をするつもりで私はいます」

と、言葉でも伝えさせた。ひどく忌む性質の穢れでもないから
と言つて、夫人はしいて大輔を座敷へ招じた。そして返事を泣く
泣く書いていた。

悲しい思いをいたしますだけでは死なれませぬ命を歎いており
ます私へ、もつたいないおいたわりの言葉などのただけです
とは夢想もいたしませんでした。故人がおりました間、心細い
様子は見ておりながら、それは私自身の無力からであると存じ
まして、ただおそれ多い行く末かけてのあたたかいお言葉一つ
を頼みにいたしておりましたが、死なせましてあとではあの地
との因縁が悲しくばかり思われてなりません。いろいろと将来

のことでうれしい仰せを賜わりましたことで、命の延びることにもなりました、今しばらく生きてまいれますことになりましたたら、その息子たちのことであなた様のお力におすがり申し上げる日もあるうと思いますにつけても、あの人の亡くなつてありませぬ現在の悲しみに目も涙で暗くなるばかりでございますまして、感謝の思いも書き尽くすことができせんのをお許しください。

などと書いた。使いへの贈り物に普通の品を出すべき場合ではないし、またそれだけでは不満足な感じをあとでみずから覚えさせられることであろうからと思い、貴重品として将来は故人の姫

君に与えようと考えていた高級な斑犀はんさいの石帯せきたいとすぐれた太刀たちなどを袋に入れ、車へ使いが乗る時いっしょに積ませた。

「これは故人の志でございます」

と言わせて贈ったのであった。

帰った使いは贈られた品を大将に見せると、

「よけいなことをするものだね」

と薫は言った。使いの伝えた言葉は、

「奥さんが自身でお逢いになりました、非常に悲しい御様子で、泣く泣くいろいろの話をなさいました。若い息子たちのことまでも御親切におっしゃっていただきましたことはもったいないこと

で、うれしく存じますが、しかしながらまたあまりに恐縮な当方の身分でございますから、人には何のためにとは絶対に知らせぬようにいたしまして、できのよろしい子供たちだけを皆お邸やしきへ差し上げることになりました」

その言葉どおりに奇妙な親戚しんせき関係と人には見られることであるうが、宮中へそうした地方官が娘を差し上げないこともないのであるし、また素質がよくて帝王がそれをお愛しになることになってもお譏そしりする者はないはずである、人臣である人たちはまして世間から無視されている階級の家の娘を妻にしている類も多いのである、常陸守ひたちのかみの娘であったと人が言っても自分の恋愛の径路が

悪いものであれば指弾もされようが、そんなことではないのであるからはばかりする必要もない、一人の大事な娘を不幸に死なせた母親を、その子ののこした縁故から一家に名誉の及ぶことで慰めるほどの好意はぜひとも自分の見せてやらねばならないのが道であると薫は思った。

母の隠れ家へは常陸守が来て立ちながら話すのであったが、娘に出産のあったおりもおりにだれかの触穢しよくえを言い立てて引きこもっていることなどで腹だたしいふうに言っていた。去年の夏以来姫君がどこにいるかをありのままには夫人の言っただけでなかった常陸守であったから、寂しい生活をしていることであろうと思っても

し、言いもしていたのを大将に京へ迎え入れられたあとで、名誉な結婚をしたと知らせようと夫人が思っていたうちに浮舟は死んでしまったのであったから、隠しておくのもむだなことであると夫人は思い、薫と結婚をして宇治に住まわせられていたこと、そして病んで死んだ話を泣く泣く語るのであった。薫からもらった手紙も出して見せると、貴人を崇拜する田舎風な性質になつている守は驚きもし臆おくしもしながら繰り返し繰り返し薫の手紙を読んでいる。

「幸福で名誉な地位を得ていて死んだ方だ。自分も大将の家人けにんの数にはしていただいている者で、お邸へはまいることがあっても

近くお使いになることもなかった。とても気高けだかい殿様なのだ。息子たちのことを言ってくだすったのは非常にあれらのために頼もしいことだ」

こう言って喜ぶのを見ても、まして姫君が大将夫人として生きていたならばと思わないではいられない夫人は、臥ふしまろんで泣いていた。守もこの時になってはじめて泣いた。しかしながら浮舟が生きているとすれば、かえって異父弟の世話を引き受けようなどと薰はしなかったことであろうと思われる。自身の過失から常陸夫人の愛女を死なせたのがかわいそうで、せめて慰めを与えられることだけはしたいと思う心から、他の譏そしりがあるうとも深く気

にとめまいという気になっているのである。

薫は四十九日の法事の用意をさせながらも実際はどうあの人はなつたのであろう、まだ一点の疑いは残されていると思うのであるが、仏への供養をすることは人の生死にかかわらず罪になることではないからと思い、ひそかに宇治の律師の寺で行なわせることにしているのであつた。六十人の僧に出す布施の用意もいかめしく薫はさせた。母夫人も法会には来ていて、式をはなやかにする寄進などをした。兵部卿の宮からは右近の手もとへ銀の壺つぼへ黄金の貨幣を詰めたのをお送りになつた。人目に立つほどの派手はでなことはあそばせなかつたのである。ただ右近が志として供物にし

たのを、事情を知らぬ人たちはどうしてそんなことをしたかと不思議がった。薫のほうからは家司けいしの中でも親しく思われる人たちを幾人もよこしてあった。在世中はだれもその存在を知らなんだ夫人の法事を、薫がこんなにまで丁寧に営むことによつて、どんな婦人であつたのかと驚いて思つてみる人たちも多かつたが、常陸守が来ていて、はばかりもなく法会ほうえの主人顔に事を扱っているのをいぶかしくだれも見た。少将の子の生まれたあとの祝いを、どんなに派手に行なおうかと腐心して、家の中にない物は少なく、支那しな、朝鮮の珍奇な織り物などをどうしてどう使おうと驕おごつた考えを持つていた守ではあつたが、それは趣味の洗練されない

人のことであるから、美しい結果は上がらなかった。それに比べ、
てこの法会の場内の莊嚴をきわめたものになっているのを見て、
生きていたならば、自分らと同等の階級に置かれる運命の人でな
かったのであったと守は悟った。兵部卿の宮の夫人も誦經ずきょうの寄付
をし、七僧への供膳きようぜんの物を贈った。

今になって隠れた妻のあったことを帝みかどもお聞きになり、そうし
た人を深く愛していたのであろうが、女二にょにの宮みやへの遠慮から宇治
などへ隠しておいたのであろう、そして死なせたのは気の毒であ
ると思召した。

浮舟の死のために若い二人の貴人の心の中はいつまでも悲しく

て、正しくない情炎の盛んに立ちのぼっていたところにそのことがあつたため、ことに宮のお歎きは非常なものであつたが、元来が多情な御性質であつたから、慰めになるかと恋の遊戯もお試みになるようなこともようやくあるようになった。薫は故人ののこした身内の者の世話などを熱心にしてやりながらも、恋しさを忘れなく思っていた。

中宮ちゅうぐうもまだそのまま叔父おじの宮の喪のために六条院においていたのであつたが、二の宮はそのあいた式部卿にお移りになつた。お身柄が一段重々しくおなりになつたために、始終母宮の所へおいでになることもできぬことになつたが、兵部卿ひょうぶしやうの宮は寂しく悲

しいままによくおいでになつては姉君の一品いっほんの宮の御殿を慰め所
にあそばした。すぐれた美貌びぼうであらせられる姫宮をよく御覧にな
れぬことを物足らぬことにしておいでのなるのであつた。右大将
が多数の女房の中で深い交際をしている小宰相こさいしやうという人は容貌ようぼうな
どもきれいであつた。価値の高い女として中宮も愛しておいでに
なつた。琴の爪音つまおとも琵琶びわの撥音ばちおとも人よりはすぐれていて、手紙を
書いてもまた人と話しをしても洗練されたところの見える人で
あつた。兵部卿の宮も長くこの人に恋を持っておいでになるので
あつて、例の上手じょうずに説き伏せようとお試みになるのであるが、誘
惑をされてだれも陥るような御関係を作りたくないといふ強い態度を

変えないのを、薫^{かおる}はおもしろい人であると思つて好意が持たれるのである。このごろの薫が物思いにとらわれているのも知つていて、黙っていることができぬ気もして手紙を書いて送つた。

哀れ知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつつぞ経^ふる

私が代わつて死んでおあげすればよかつたように思われます。

と感じのよい色の紙に書かれてあつた。身にしむような夕方時のしめっぽい気持ちをよく察して訪^{たず}ねの文^{ふみ}を送つた心持ちを薫は感謝せずにはおられなかつた。

つれなしとこから世を見るうき身だに人の知るまで歎きやは
する

これを返歌にした。

答礼のつもりで、

「寂しい時の御慰問のお手紙はことにありがたく思われました」

と言いに小宰相の家を薰は訪ねて行った。貴人らしい重々しさが十分に備わり、こんなふうの中宮の女房の自宅へなど、今まで一度も行ったことのない薰が訪ねて来た所としては貧弱な邸であつた。局などと言われる狭い短い板の間の戸口に寄つて薰の坐

しているのを片腹痛いことに思う小宰相であったが、さすがにあまりに卑下もせず感じのよいほどに話し相手をした。失った人よりもこの人のほうに才識のひらめきがあるではないか、なぜ女房などに出たのであろう、自分の妻の一人として持っていてよかった人であったのにと薫は思っていた。しかしながら友情以上に進んでいこうとするふうを少しも薫は見せていなかった。

蓮はすの花の盛りのころに中宮は法華ほけ経の八講を行なわせられた。六条院のため、紫夫人のため、などと、故人になられた尊親のために経巻や仏像の供養をあそばされ、いかめしく尊ほうえい法会であった。第五巻の講ぜられる日などは御陪観する価値の十分にあるも

のであったから、あちらこちらの女の手蔓てづるを頼んで参入して拝見する人も多かった。五日めの朝の講座が終わって仏前の飾りが取り払われ、室内の装飾を改めるために、北側の座敷などへも皆人がはいって、旧態にかえそうとする騒ぎのために、西の廊の座敷のほうへ一品の姫宮は行っておいでのになった。日々の多くの講義に聞き疲れて女房たちも皆部屋へやへ上がっていて、お居間に待している者の少ない夕方に、薫の大將は衣服を改めて、今日退出する僧の一人に必ず言っておく用で釣殿つりどののほうへ行ってみたが、もう僧たちは退散したあとで、だれもいなかったから、池の見えるほうへ行つてしばらく休息したあとで、人影も少なくなっているの

を見て、この人の女の友人である小宰相などのために、隔てを仮に几帳きちょうなどですてて休息所のできているのはここらであらうか、人の衣擦きぬずれの音がすると思ひ、内廊下の襖子からかみの細くあいた所から、静かに中をのぞいて見ると、平生女房級の人の部屋へやになつてゐる時などとは違ひ、晴れ晴れしく室内の裝飾ができていて、幾つも立ち違ひに置かれた几帳はかえつて、その間から向こうが見通されてあらわなのであつた。氷を何かの蓋ふたの上に置いて、それを割ろうとする人が大騒ぎしてゐる。大人おとなの女房が三人ほど、それと童女がいた。大人は唐衣からぎぬ、童女は衫かぎみも上に着ずくつろいだ姿になつていたから、宮などの御座所になつてゐるものとも見えない

のに、白い羅うすものを着て、手の上に氷の小さい一切れを置き、騒いでいる人たちを少し微笑をしながらながめておいでになる方のお顔が、言葉では言い現あらわわせぬほどにお美しかった。非常に暑い日であつたから、多いお髪ぐしを苦しく思召すのか肩からこちら側へ少し寄せて斜めになびかせておいでになる美しさはたとえるものもな
いお姿であつた。多くの美人を今まで見てきたが、それらに比べられようとは思われない高貴な美であつた。御前にいる人は皆土のような顔をしたものばかりであるとも思われるのであつたが、
気を静めて見ると、黄すずしの涼絹ひとえの単衣うすむらさきに淡紫もの裳をつけて扇を使つている人などは少し気品があり、女らしく思われたが、そうした

人にとって氷は取り扱いにくそうに見えた。

「そのままにして、御覧だけなさいませよ」

と朋輩ほうはいに言って笑った声に愛嬌あいきょうがあつた。声を聞いた時に薫は、はじめてその人が友人の小宰相であることを知った。とどめた人のあつたにもかかわらず氷を割ってしまった人々は、手ごと一つずつの塊かたまりを持ち、頭の髪の上に載せたり、胸に当てたり見苦しいことをする人もあるらしかった。小宰相は自身の分を紙に包み、宮へもそのようにして差し上げると、美しいお手をお出しになって、その紙で掌てをおぬぐいになった。

「もう私は持たない、凜れんがめんどうだから」

と、お言いになる声をほのかに聞くことのできたのが薫のかぎりもない喜びになった。まだごく小さい時に、自分も無心にお見上げして、美しい幼女でおありになると思った。それ以後は絶対にこの宮を拝見する機会を持たなかったのであるが、なんという神か仏かがこんなところを自分の目に見せてくれたのであろうと思い、また過去の経験にあるように、こうした隙見すきみがもとで長い物思いを作らせられたと同じく、自分を苦しくさせるための神仏の計らいであろうかとも思われて、落ち着かぬ心で見つめていた。ここの対の北側の座敷に涼んでいた下級の女房の一人が、この襖子からかみは急な用を思いついてあけたままで出て来たのを、この時

分に思い出して、人に気づかれては叱しかられることであろうとあわてて帰って来た。襖ふすま子に寄り添よった直衣姿のうしの男を見て、だれであろうと胸を騒がせながら、自分の姿のあらわに見られることなどは忘れて、廊下をまっすぐに急いで来るのであった。自分はすぐにここから離れて行ってだれであるとも知られまい、好色男らしく思われることであるからと思いい、すばやく薰は隠れてしまった。その女房はたいへんなことになった、自分はお几帳きちょうなども外から見えるほどの隙すきをあけて来たではないか、左大臣家の公達きんだちなのであろう、他家の人がこんな所へまで来るはずはないのである、これが問題になればだれが襖ふすま子をあけたかと必ず言われるで

あろう、あの人の着ていたのは単衣ひとえも袴はかまも涼絹すずしであつたから、音がたたないで内側の人は早く気づかなかつたのであろうと苦しんでいた。

薫は漸く僧に近い心になりかかつた時に、宇治の宮の姫君たちによつて煩惱ぼんのうを作り始め、またこれからは一品いっほんの宮みやのために物思ものしいを作る人になる自分なのであろう、その二十はたちのころに出家をしていたなら、今ごろは深い山の生活にも馴なれてしまい、こうした乱れ心をいなくことはなかつたであらうと思ひ続けられるのも苦しかった。なぜあの方を長い間見たいと願つた自分なのであろう、何のかがあろう、苦しいもだえを得るだけであつたのにと

思った。

翌朝起きた薫は夫人の女二の宮の美しいお姿をながめて、必ずしもこれ以上の御美貌びぼうであつたのではあるまいと心を満ち足りたようにしいてしながら、また、少しも似ておいでにならない、超人間的にまであの方は気品よくはなやかで、言いようもない美しさであつた。あるいは思いなしかもしれぬ、その場合がことさらに人の美を輝かせるものだったかもしれぬと薫は思い、

「非常に暑い。もっと薄いお召し物を宮様にお着せ申せ。女は平生と違つた服装をしていることなどのあるのが美しい感じを与へるものだからね。あちらへ行って大弐だいにに、薄物の単衣ひとえを縫つて来

るように命じるがいい」

と言いだした。侍している女房たちは宮のお美しさにより多く異彩の添うのを楽しんでの言葉ととって喜んでいた。いつものように一人で念誦ねんずをする室へやのほうへ薫は行っていて、昼ごろに来てみると、命じておいた夫人の宮のお服が縫い上がって几帳きちょうにかけられてあった。

「どうしてこれをお着にならぬのですか、人がたくさん見ている時に肌はだの透く物を着るのは他をないがしろにすることにもあたりませんが、今ならいいでしょう」

と薫は言って、手ずからお着せしていた。宮のお袴はかまも昨日の方

と同じ紅であつた。お髪ぐしの多さ、その裾すそのすばらしさなどは劣つてもお見えにならぬのであるが、美にも幾つの級があるものか女二の宮が昨日の方に似ておいでになつたとは思われなかつた。氷を取り寄せて女房たちに薫は割らせ、その一塊ひとかたまりを取つて宮にお持たせしたりしながら心では自身の稚態がおかしかつた。絵に描かいて恋人の代わりにながめる人もないのである、ましてこれは代わりとして見るのにかげ離れた人ではないはずであると思うのであるが、昨日こんなにしてあの中に自分もいっしょに混じつていて、満足のできるほどあの方をながめることができたのであつたならと思つと、心ともなく歎息の聲が發せられた。

「一品の宮さんへお手紙をおあげになることがありますか」

「御所にいましたころ、お上かみがそうおっしゃったものですから、差し上げたこともありましたが、ずいぶん長く御交渉はなくなっています」

「人臣の妻におなりになったからといって、あちらからお手紙をくださらなくなったのでしょうが、悲観させられますね。そのうち私から中宮へあなたが恨んでおいでになると申し上げよう」

と薫は言う。

「そんなこと、お恨みなど私はしているものでございますか。いやでございます」

「身分が悪くなったからといって軽蔑けいべつをなされるらしいから、こちらからは御遠慮して消息を差し上げないとそんなふうに言いましょう」

こんなことを言っつてその日は暮らし、翌日になつて大将は中宮の御殿へまいつた。例の兵部卿ひょうぶきやうの宮も来ておいでになつた。丁子ちやうじの香と色の染しんだ羅らの上うすものに、濃い直衣のうしを着ておいでになる感じは美しかった。一品いっぽんの宮みやのお姿にも劣らず、白く清らかな皮膚の色で、以前より少しお瘦やせになつたのがなおさらお美しく見せた。女宮によく似ておいでになるということから、またおさえている恋しさがわき上がるのを、あるまじいことであると思ひ、静めよ

うとするのもあの日の前には知らぬ苦しみであった。兵部卿の宮は絵をたくさんに持って来ておいでになったが、そのうちの幾つかを女房に姫宮のほうへ持たせておあげになり、御自身もあちらへおいでになった。

薫は後の宮のお近くへ寄って行き、御八講の尊かったことを言い、六条院のことも少しお話し申し上げながら、残った絵を拝見している時に、

「私の所に来ておいでになります宮さんが、宮廷から離れて屈託した気持ちになっておられますのをお気の毒だと見ております。一品の宮様のお消息などをいただけませんことを人妻に降くだったこ

とで愛をお捨てになったように思っただけで楽しんでしまないふうなのでございますが、こういたしたものだをとぎどき見せてあげてください。私どもはいいかげんさうしよう。私がその使いはいたします。私どもほうのも持ってまいります」

と中宮へ申し上げると、

「まあそんなことで御交際をおやめになるものですか。同じ御所の中におられたころは、近いものですからときどき手紙が通ったのでしようが、遠く離れ離れにおなりになった時からお手紙が途絶え始めて、そのままになったことなのでしょう。そのうち私からお勧めしてお書きになるようにしますよ。そちらからだってお

手紙をお送りになればいいのにね」

と、宮は仰せられた。

「そちらからは出過ぎたように思われておできにならないのでしよう。初めから御交渉のなかった方にいたしましても、私と宮様がたとの縁の続きに愛しておあげくださることになるのがうれしい成り行きなのですが、まして以前から御交際のあった間柄でおありになるのですから、私の所へ来られましたあとでお捨てになるのは、あの宮さんにとっておかわいそうなことです」

などと申しているのを、恋が言わせることと中宮はお悟りにならなかった。

薫は中宮のお居間を辞して、先夜の好意のある女友人にも逢おう、あの思い出の廊の座敷を心の慰めに見て行こうと思い、縁側伝いに西に向いて歩いて行った。御簾みすの中なにいる女房たちはそれだけのことにすら心づかいのされる薫の大將であった。渡殿わたどののほうには左大臣の息子らがいて、女房たちと話し合っている様子であったから、この人は妻戸のところところにすわって、

「始終この院へはまいっている私ですが、こちらの宮様の御殿へ伺うことができないでいますと、自然老人めいた気持ちになるようになったのですが、これからはそうしてしまいと決心してまいったのですよ。馴なれない人間の恰好かっこうは滑稽こっけいなものものに若い人たち

からは見られることでしょう」

甥おいの公子たちのほうを見ながらこう言っていた。

「ただ今からお習いになりましたなら新鮮なお若さが拝見される
ことでしょう」

などと戯れて言う女房らからも怪しいまでの高雅な感じの受け
取られるのであった。何をおもな話題にするといふのでもなく、
世間話を平生よりもしんみりと話し込んで薫かおるはいた。

姫宮は中宮ちゆうぐうの御殿のほうへおいでになった。後の宮が、

「大将があちらへ行きましたか」

とお尋ねになると、一品の宮のお供をしてこちらへ来た大納言

の君が、

「小宰相に話があると言っていていらっしやいました」

と申した。

「まじめな人であって、さすがに女の友だちにも心の惹ひかれるところがあってむだ話もして行きたいのだろうがね。才能のない人が相手をしては恥ずかしい。女の価値がすぐ見破られるからね。

小宰相ならまず安心だけれど」

こんなことをお言いになる宮は、御弟なのであるが、薫に周囲を観察されることを恥ずかしく思召し、女房らも飽き足らず思われるところを見せぬようにしてほしいと思召すのである。

「あの人をだれよりも御ひいきになさいまして、部屋のほうへも寄ってお行きになることがよくあるようでございます。しんみりとお話をしておいでになることもございまして夜がふけてお帰りになることはありません。でも恋愛関係と申すようなことはなさそうに思われます。あの人兵部卿の宮様の御性情には反感を持っておりまして、お返辞すらよくいたさないようでございますのはもったいないことでございます」

と言い、大納言の君が笑うと、中宮もお笑いになって、

「あの宮の多情な本質が直感できるのだからいいね。どうしてあの方の悪癖を直させたらいいだろう、恥ずかしいと私は思う。だ

でになったのでございますが、家の中へおはいりになることができませんで、危険なことでございますが、お馬のまま外に立つておいでになり、それなり帰っておしまいになったということでございます。女も宮様をお慕いしていたのでしようか、にわかに行くえがわからなくなりましたのを、川へ身を投げたのであると、乳母うぼというような者が泣き騒いで言っていたそうでございます」

大納言の君はこんな話を申し上げた。中宮がお驚きになったことは言うまでもない。

「だれがまあそんな噂話うわさばなしをしていたの、ほんとうにかわいそうな

話ではないか。そんな出来事はすぐ噂になるものなのに、そうでもなし、また大将もそんなふうには話さずに、人生の悲哀を強調して話すだけで、また宇治の宮さんの一族が皆短命で死ぬのは悲しいことだとは言っていたけれども」

「ほんとうでございますか、どうぞでございますか、しもぎまの者は確かでないこともほんとうらしく話にいたすものですが、その宇治の山荘におりました下童しもわらわがついこのごろ宰相の実家のほうへ来まして、確かなことのように申していたそうでございます。そうした死に方をなさいましたことを世間へ知らすまい、自殺などという思いきったことをした人だと言わすまいと皆が隠すことに

骨を折ったそうでございます。それで大将さんもくわしいお話をあそばさなかつたのではないでしようか」

「その話をまたほかへ行つてするなと宰相からお言わせよ。そうした問題で宮は自身をだいなしにしておしまいになることにもなり、世間からも軽蔑けいべつされることにおなりになるだらう」

こうお言いになつて、中宮は非常に御心配をあそばす御様子であつた。

それからまもなく一品の宮から女二の宮へお手紙が来た。御手跡のおみごとであるのを見ることができたことが薰にはうれしくて、期待にはずれないごりっぱさである、もっと早くこれが拝見

できる方法を講ずべきであったなどと思った。多くの美しい絵などを中宮からもお送りになった。お礼として薫からもそれにまざった絵を集めて差し上げることにした。小説の芹川せりかわの大將が女一の宮を恋して秋の日の夕方に思い侘わびて家から出て行くところを描かいた絵はよく自身の心持が写されているように思われる薫であった。その人のように成功すべき恋でないのが残念であった。

荻をぎの葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみにける

と書き添えたい気がするのであるが、そうしたことは気^けぶりにも知れたならばどんなことの言われるかしれぬ世の中であるからと、思うことすらも洩^もらしがたい恋に心を悩ませ、はては宇治の大姫君さえ生きていてくれたならば、その人を妻とすることができていたのであれば、どんな人を見ても心の動揺することなどはなかったはずである。現代の帝王の御女^{おんむすめ}を賜わるといっても、自分はお受けをしなかったはずである、また自分がそれほど愛している妻があるとわかっておいでになって姫宮をお嫁^{とつ}がせになることもなかろう、何といっても自分の心の混乱し始めたのは宇治の橋姫のせいであると、こんなことを思っ^ててゆくうちに薰の心はま

た二条の院の女王の上に走って、恋しくも恨めしくもなり、取り返されぬ昔を愚かしいまでに残念に思った。もうどうすることもできないことなのであると、それを心に片づけたあとでは、また自殺をしてしまったうきふね浮舟が、思想的に幼稚でよこしまな情熱に逢あってたちまち動かされていった軽率さを認めながらも、さすがに煩悶を多くしていたこと、そのころに自分の気持ちの変わったことで、自責の念から歎きに沈んでいた様子を宇治で聞いて知ったことも思い出され、妻というような厳粛な意味の相手ではなく、心安く可憐かれんな愛人としておきたいと思うのにはふさわしくかわい女性であったと考えられ、もう宮に不快の念を持つまい、

女をも恨むまい、ただ自分の非常識から若い愛人をああした場所へ置き放しにしていたのがあやまちの原因だったのであると、こんなふうには物思いの末にはあきらめをつけることにもなった。

静かな落ち着いた薫さえこんなふうには恋愛については身体からだにもさわるほどな苦しきも時には味わうのであるから、まして浮舟をお失いになった兵部卿の宮は心を慰めかねておいでになって、その人の形見の人として悲しみを語り合う人さえもおありでなく、対の夫人だけは哀れな人であつたと言つてくれはするものの、姉きょう妹まいとして交わっていた期間はわずかなことであつたから、深い悲しみは覚えているはずもない、また宮としては思召すままに恋し

い悲しいとお言いになることも、夫人に向かつてのことであるからお心のとがめられることであるために、あの山荘の侍従をお呼び寄せになった。女房たちは皆ちりぢりに去ってしまったあとに、乳母めのとと右近、侍従だけは故人が最も親しんだ人たちであったから、喪の家から離れず、一方は親子であって、侍従は関係のない間柄ではあるが、いっしょに山荘へ残って暮らしていたのであったが、荒々しい川音を聞くのも、そのうち京の邸やしへ姫君の迎えられて行く日を楽しみにして辛抱しんぱうされたものの、情けなく、気味悪くばかり思われて、京のちよつとした知り合いの家へこのごろは侍従だけが移って来ていた。宮がお捜させになってこのまま

二条の院の女房になるようにと仰せになるのであったが、夫人はともかくも、他の女房たちから浮舟の姫君と宮とのあるまじい情交の起こっていたことで何かと非難がましいことを言われるであろうことが思われお受けをしなかった。中宮の女房になってお仕えしたいとそれとなく内記に言ってもらうと、

「それはよい。そして自分が陰で勤めよくなるようにしてやる
う」

と言う宮のお返辞であった。侍従は姫君を失った心細さも慰むかと思ひ、手蔓てづるを求めて目的の宮仕えをする身になった。見た目のきれいな下級女房であると人も認めて、侍従は悪くも言われて

いなかっただ。大将もよくまいるのを蔭かげで見ると、昔が思われる物哀れな心になった。貴族の姫君たちだけのお仕えしている場所だと聞いていて、そうした上の女房たちの顔をこのごろ皆見知るようになってから考えても、浮舟の姫君ほどの美貌の人はないようであった。

今年の春お薨かくれになった式部卿しきぶきょうの宮の姫君を、継母ままははの夫人が愛しないで、自身の兄うまのかみの右馬頭うまのかみで平凡な男が恋をしているのに、姫君をかわいそうとも思わずに与えようとしていることを中宮へあつる人から申し上げると、

「気の毒な、宮様がたいへん大事になすった女王にょおうさんを、そんな

廃^{すた}り者にしてしまおうとするなどとは「

と憐^{あわれ}んで仰せられた。

「たよりない心細い思いをしているあなたにそうしたあたたかい同情を寄せてくださるのだから、中宮へお仕えしたら」

と、兄の侍従も宮仕えを勧めた女王を、このごろ中宮は手もとへ侍女にお迎えになった。女^{にょいち}一^{みや}の宮のお相手として置くのによい貴女^{きじよ}と思召して、特別な御待遇を賜わって侍しているのであったが、お仕えする身であるかぎり、やはり宮の君などと言われ、唐^{から}衣^{ぎぬ}までは着ぬが裳^もだけはつけて勤めているのは哀れなことであった。兵部卿^{ひょうぶけい}の宮は、この人だけは恋しい故人に似た顔をしている

であろう。式部卿の宮と八の宮は御兄弟なのであるからなどと、例の多情なお心は、昔の人の恋しいために、新たな好奇心もお起こしになることがやまず、いつとなく宮の君を恋の対象としてお考えになるようになった。

人生は味気ないとこの女王についても薫は思うのであった。ただ昨今というほどのことではないか、東宮の後宮へお入れになるうと父宮がお思いになり、自分へも娶めとらせようとされた姫君である、栄えた人のたちまち衰えてゆくのを見ては、水へはいつてしまった人はそれを見ぬだけ賢明であったかもしれぬなどと薫は思い、他の女房に対するよりもこの女王に好意を寄せていた。

六条院に中宮ちゆうぐわうのおいでになることは、宮中のお住居すまいよりも広く住みよくだれも思い、時々まいるだけで始終は侍していぬ人までも皆上がって来ていて、はるばると多く続いた対、廊、渡殿の座敷は女房で満ちていた。左大臣は父君の院の御在世当時にも劣らず中宮のためにあらゆる物をととのえて奉仕していた。末広がりになった一族であったから、かえって昔よりも六条院のはなやかさはまさってさえ見えた。兵部卿の宮が今までのようなふうでおありになれば、この集まった女性の中のある人々とこの幾月かのうちにはどんな問題を起こしておいでになるかもしれないのであるが、すっかりと冷静におなりになり、人から見れば少し性質が

お変わりになつたかと思われたのであるが、近ごろになつてまた宮の君にお心を惹ひかれ、御本性どおりにつきまとしておいでになつた。

秋冷の日になつて中宮は宮中へ歸ろうとあそばされるのであつたが、秋の盛りの紅葉もみじの季にここで逢えないのは残り惜しいことであると若い女房たちは言い、だれも皆実家にいず、このごろは六条院にまいつていた。水を愛し、月の景色けしきを喜んで音楽の催しなども常にあつた。兵部卿の宮は常よりもはなやかな六条院を愛して、この空気くわいの中心のようになっておいでになるのである。朝夕にお顔を見ているながらも、いつも今咲きそめた花に逢あう気のさ

れる兵部卿の宮であつた。薫はそれほど入り立っていないのであるために、若い中宮の女房たちは、この人が来れば緊張してしまふのであつた。ちようどこの二人の若い貴人の同時に中宮のお居間に来合わせている時であつたが、宇治にいた侍従は物蔭からぞいて、どちらにもせよこのりっぱな方々の一人に愛されて生きておいでになればよかつた。恵まれておいでになつた幸運をわれから捨てておしまいになつた姫君であると思ひ、他の人には宇治の山荘のこと、薫の愛人であつた姫君のことなどは知つたふうには言つてないことであつたから心一つに残念がつていた。兵部卿の宮が御所のお話などを細かく母宮へしかかつておいでにもなつ

たため、薫がお居間を出て行こうとするのを見、自分を見つけさすまい、一年の忌の来るのも済まさずに宇治を去ったのは故人へ情のないことであるとは思われたくないと思い、侍従はすぐに隠れてしまった。

東の廊の座敷のあいた戸口に女房たちがおおぜいいてひそひそと話などをしている所へ薫は行き、

「私をあなたがたは親しい者として見てくださるでしょうか、女にだって私ほど安心してつきあえるものではありませんよ。それでも男ですから、あなたがたのまだ聞いていない新しい話も時にはお聞かせすることができるとですよ。おいおい私の存在価値が

わかっていただけれるだろうという自信がそれでもできましたからうれしく思っています」

こんな戯れを言いかけた。だれも晴れがましく思い、返辞をしにくく思っている中に、弁の君という少し年輩の女が、

「お親しみくださる縁故のない者がかえって私のように恥じて引っ込んでいないことになります。ものは皆合理的にばかりなつてゆくものではございませんね。だれの家のだれの子でございませうからと申しておつきあいを願うわけのものでもありませんけれど、羞恥心しゆうちを取り忘れたようにお相手に出ました者はそれだけの御挨拶あいさつをいたしておきませうとは存じますから」

と言った。

「羞恥心も何も用のない相手だと私の見られましたのは残念ですね」

こんなことを薫^{かおる}は言いながら室^{へや}の中を見ると、唐衣^{からぎぬ}は肩からはずして横へ押しやり、くつろいだふうになって手習いなどを今まですしていた人たちらしい。硯^{すずり}の蓋^{ふた}に短く摘んだ草花などが置かれてあるのはこの人らがもてあそんだものらしい。ある人は几帳の立てである後ろへ隠れ、ある人は向こうを向き、ある者は押しあけられてある戸に姿の隠れるようにしてすわっているの、頭の形だけが美しく見えた。すべて感じよく思って薫は硯を引き寄

せ、

女をみなへし郎花乱るる野べにまじるとも露のあだ名をわれにかけめや

こう書いて、

「安心していらっしやればいいのに」

と言ひ、すぐ近くの襖からかみ子のほうを向いている人に見せると、相
手は身動きもせず、しかもおおように早く、

花といへば名こそあだなれをみなへしなべての露に乱れやは

する

と書いた。手跡は、少ない文字であるが気品の見える感じよいものであるのを、薫は何という女房であろうと思って見ていた。

今から中宮のお居間へこの戸口を通って行こうとして、薫の来たためにも出られずなった人らしく思われた。弁の君は、

「わざと老人じみたことをお言いになつては反感が起こるものですよ」

と言ひ、

「旅寝してなほ試みよをみなへし盛りの色に移り移らず

そのあとであなたをどんな性質で、お堅いともそうでないと
も、きめましょう」

とも言う。

宿貸さば一夜は寝なんおほかたの花に移らぬ心なりとも

薫が言ったのである。

「私を侮辱あそばすのでございますね。自分のことではございま

せんよ。一般的に抗議を申し上げただけでございます」

と弁は言う。こんなふうに戯れ言も薫は長くは言っていないらしく見えるのを若い女房たちは飽き足らず思っていた。

「思いやりのないことをしましたね。あなたの道をあげましょう。とりわけて私に顔をお見せにならない態度には理由のあることでしょう」

と言い、薫の立って行くのを見て、だれもが弁のようにはしゃぐ者のように思われぬかと気にする人もあった。東の高欄によりかかって、叢くさむすぶの中に夕明りを待って咲きそめる花のある植え込みを薫はながめていた。何も皆身にしむように思われる薫は、「就なかん

づくはらわたをたつはこれあきのてん

中断腸是秋天」と低い声で口ずさんでいた。先刻の人らしい衣擦きぬずれの音がして、中央の室へやから抜けてあちらへ行つた。兵部卿の宮がそこへ歩いておいでになつて、

「ここから今あちらへ行つたのはだれか」

と他の者に尋ねておいでになつた。

「一品いっぽんの宮様みやのほうの中将さんでございます」

と答える声も御簾みすの中でした。おもしろくないことである、だれであろうとかりそめにもせよ好奇心の起こつた人が、すぐにだれそれであると名ざしをして聞かれるではないか、とその女がかわいそうに思われ、また兵部卿の宮には皆よくお馴なれしていて、

隠すところもなくなっているのがなんとなくうらやましい気もする薫であった。自由に接近してお行きになることができ、上手なじょうず技巧で誘惑をあそばされては女も負けることになるのであろう、自分にはそんなことができず、こちらの人たちとは、縁の遠いとうとしいものになっているのが残念である。侍している人の中で、どうかして近ごろ兵部卿の宮がはげしく恋をしておいになる人を自分のものにして、あの時に自分が苦しんだような思いを宮にもお味わわせしたい。聡明な女であれば自分のほうを愛するはずであるとは思われるが、こちらの考えどおりな心を持っているかどうかは頼みになるものでないと思われるにつけても、二条

の院の女王が、宮のああした御放縦な恋愛生活を飽き足らず見て、自分の愛を頼むようになり、それを恋にまでなってはならぬ、世間の批評がうるさいと思いつつながら友情だけはいつも捨てぬのは珍しく聡明な態度で、自分としてはうれしいかぎりである、そんなすぐれた女性はこれのおおぜいの若い女房たちの中に一人でもあるであろうか、深く接近して見ぬせないように思われる、物思いに寝ざめがちな慰めに恋愛の遊戯も少し習いたいたいと思いが、もう今は似合わしくないと薰は思った。例の氷を割られた日の西の渡殿へ、その日のようにふらふらと薰が来てしまったのも不思議であった。姫宮は夜だけ母宮の御殿のほうへおいでにな

るため、もうお留守になっでいて、女房たちだけで月を見ると言
い、渡殿に打ち解けて集まっていた。十三絃げんの琴を懐ねしい音で弾ひ
くのが聞こえた。人々の思いもよらぬこんな時に薫が出て来て、

「なぜ人を懊惱おうのうさせるように琴など鳴らしていらっしやるのです
か。（遊仙窟。みみにきくもなほきたえんと動にみていかばかりおもしろうからん耳聞猶気絶、眼見若為憐）」

こう言うのに驚いたはずであるが、少し上げた御簾みすをおろしな
どもせず、一人は身を起こして、

「崔季珪さいきけいのようなお兄様がいらっしやるかしら」

と言う。その声は中将の君といわれていた女であつた。

「私は宮様の母方の叔父おじなのですよ。（遊仙窟。かんばせはをぢはんあんじんにとりぐわいせ容貌似舅潘安仁

いなければなりきざしはめにさいきけいのごとしいもつとなればなり

外甥、気調如兄崔季珪小妹」

こんな冗談じょうだんを言ったあとで、

「いつものように中宮様のほうへ行っておしまいになったので
しょうね、宮様はお里住まいの間は何をしていらっしやるのです
か」

思わずこんな問いを薰は発することになった。

「どこにいらっしやいまして、別にこれという変わったことは
あそばしません。ただいつもこんなふうでお暮らしになってい
らっしやるばかり」

聞いていて美しいお身の上であると思つこととで知らず知らず歎

息の声の洩れて出たのを、怪しむ人があるかもしれないと思う紛らわしに、女房たちが前へ出した和琴を、調子もそのままでかき鳴らす薫であつた。律の調べは秋の季によく合うと言われるものであつたから、気も入れて弾かぬ琴の音であるが、みずから感じの悪いものとは思われぬものの、長くも弾いていなかったのを、熱心に聞きいつていた人たちはかえって残り多さも出て苦しんだ。自分の母宮もこの姫宮に劣る御身分ではない、ただ后腹というわずかな違いがあつただけで朱雀院の帝の御待遇も、当帝の一品の宮を尊重あそばすのに変わりはなかつたにもかかわらず、この宮をめぐる雰囲気とそれとに違つたもののあるのは不思議である。

明石あかしの女のもたらしたものはことごとく高華なものであつたところなことを思う続きに薫は運命が自分を置いた所はすぐれた所であるに違いない、まして女二の宮とともに一品の宮までも妻に得ていたならばどれほど輝かしい運命であつたであらうと思つたのは無理なことと言わねばならない。

宮の君はこの西の対の一所を自室に賜わつて住んでいた。若い女房たちが何人もいる気配けはいがそこにして皆月夜の庭の景色けしきを見ていた。そうであつたあの人も浮舟らと同じ桐壺きりつぼの帝みかどの御孫であつたと薫は思い出して、

「式部卿の宮様に私を愛していただいたものなのだから」

と独言ひとりごとを言いその座敷の前へ行ってみた。美しい姿の童女が略服になって、二、三人縁側へ出ていたが、薫を見て晴れがましいというように中へ隠れてしまった。これが普通の所の情景である
と今見て来た廊の座敷と比べて薫は思った。南の隅すみの間のそばで咳せき払いをすると、少し年のいったような女房が出て来た。

「人知れず好意を持っている者ですなどと申せば、それはだれも言うことだとお聞きになるでしょうし、またそうした若い人たちの口真似まねをすることも私にはできません。それよりも言葉でない実質的な御用に立つことはいないかと捜しております」
と言うと、その女は女王にも取り次がず、賢がって、

「思いがけぬお身の上におなりあそばしましたことにつきましても、宮様がどんなにいろいなお望みを姫君の将来にかけておいでになりましたかと思われまして、悲しゅうございます。いつも御親切に仰せくださいまして、お宮仕えにおいでになりました御非難のお言葉なども、ごもつともだと女王様にやおうは言っておいでになることでございますよ」

こんなことを言う。並み並みの家の娘などのように聞こえることもはばからず言う女であるといやな気のした薫は、
「もとから血族であるためというようなことでなしに、好意を持つ男として、何かの御用をお命じくだすったらうれしいだろうと

思います。うとうとしくお取り次ぎでお話などをしてくださるだけでは私も尽くしたいことがお尽くしできない」

と言った。そうであったというふう^にに女房たちは思い、姫君を引き動かすばかりにしたはずであったから、

「松も昔の（たれをかも知る人にせん高砂たかさごの）と申すような孤立のたよりなさの思われます私を、血族の者とお認めくださいますておっしゃってくださいますあなたは頼もしい方に思われます」

取り次ぎの者に言うというふう^ににでもなしに、こういう声は若々しく愛嬌あいきょうがあつて優しい味があつた。ただの女房としてであればよい感じに受け取れたであろうが、今の身になつては、すぐ

に人に逢ってこれだけの言葉もみずから発しなければならぬもの
と思うようになったかと考えるとこの人を飽き足らぬものに薰は
思われた。容貌ようぼうも必ず艶えんな人であろうと思ひ、見たい心も覚えた
が、この人がまた宮のお心を乱す原因になることであろうと思わ
れ、絶対の信用の持てない人は相手にしたくない気にもなった。

この人こそは最上の家庭に生まれ、大事がられて育った、典型的
な姫君というのに不足のない人で、他に幾人いくたりもない身の上だった
のであるが、自分として頼もしい女性と思われぬのはどうしたこ
とであろう、僧のような父宮に育てられ、都を離れた山里おとなで大人
になった人が姉女王にもせよ中の君にもせよ、皆完全な貴女きじよに

なっていたではないか、このはかない性情の人、軽々しい人と今の心からは軽侮の念で見られる人も、こうしたわずかな接触で覚えさせた感じは悪いものでなかった、と薫は八の宮の姫君たちのことばかりがなつかしまれるのであった。

宇治の姫君たちとはどれもこれも恨めしい結果に終わったのであったとつくづくと思いつけていた夕方に、はかない姿でかげろう蜻蛉とんぼの飛びちがうのを見て、

ありと見て手にはとられず見ればまた行くへもしらず消えしかげろふ

「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかに消ゆる世
なれば」と例のように独言ひとりごとを言っていた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ 2016年3月15日 第一期製作

原稿 青空文庫
発行者 佐藤 聖
発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘C室
mail : issatudo@gmail.com
